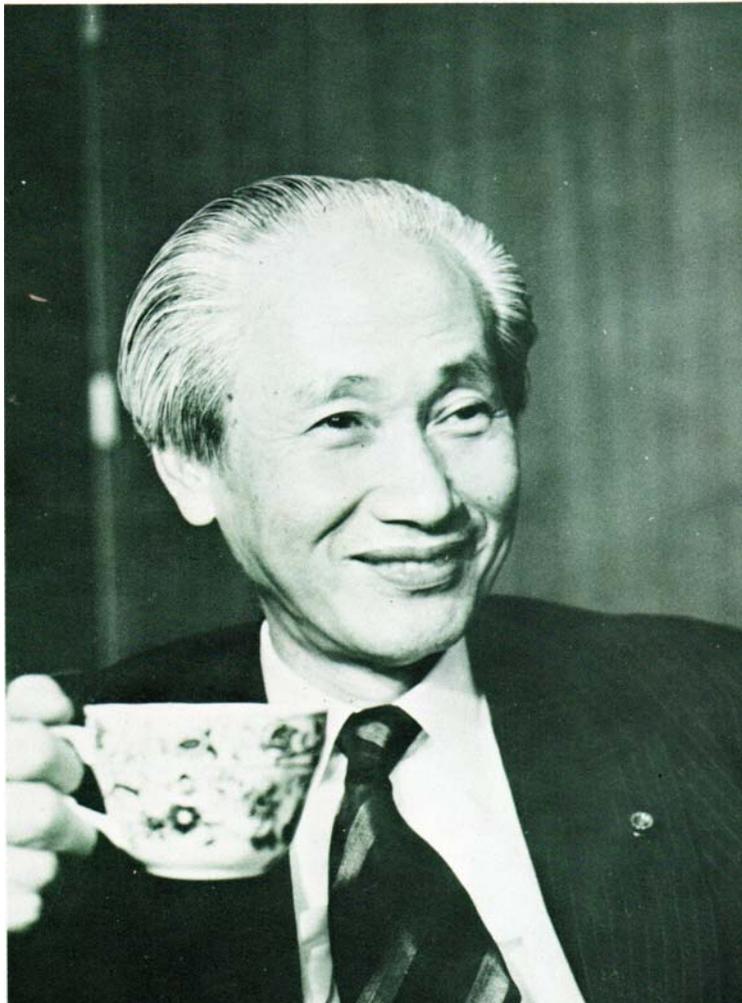


じんけん ぶんか まちづくり

一般財団法人とよなか人権文化まちづくり協会

第40号 (2013年9月)



第40号目次

- 巻頭コラム「寺本知さんの思い出」/3
- 評議員のページ「『八重の桜と』京都・黒谷金戒光明寺」/5
- 評議員のページ「市井の文化人」/9
- 報告「寺本知生誕100年・豊中水平社創立90周年記念連続講座」/10
- 寄稿「柔能く剛を制すー寺本知さんから学んだことー」/15
- 理事のページ「蓑虫いとあわれなり」/17
- 理事のページ「領家センセイ宅と幸さんのこと」/19
- 楽遊ガイド「取り消されていない『死刑』判決は重い十字架」/22
- 蛍池地域から「0歳から15歳までの育ちを見据えた地域連携を」/24
- 豊中地域から「人が出会い、つながる 夏まつり」/24
- 書評・この一冊「若紫の無窮花」/26
- 新聞切り抜き帖から「体罰による誤った指導に終止符を！」/27
- 情報BOX・とよなか「寺本知生誕100年のつどい」/29
- 紹介「自主制作 dvd『人とよなか 寺本知～つよくやさしくあたたかく～』/30
- あとがき/31

表紙の写真「鳩が珈琲をのんでいる」

これは、市議員選挙のリーフレットやハガキに使われていたと記憶している。もう40年近く前になるだろう。こんなコピーを選挙で使うなんて！と驚きかつあきれたが、一体その人は何なん？と不思議な思いがしたものだ。生誕100年ということで、その歩みと人となりを振り返る機会を得、これが妙にはまっている印象を強くした。生前、遠くはない関係にありながら、ついぞ親しく言葉を交わす機会を持たなかったこと。運動や組織をめぐるさまざまな問題について、自問自答はしながらも、それを聞いてもらうことをしなかったこと。など、思い返せば惜しまれてならない。人間と差別と藝術に帯する深い洞察力には凄みさえ感じる。(ささき)

鳩が珈琲をのんでいる

— 寺本知 大兄へ —

谷 まさし

鳩が珈琲をのんでいる
 彼が珈琲茶碗から
 顔を上げるとき
 私はいつもそう思う—
 柔いまなぎしが
 まっすぐな視線を保ち
 知らぬ間に
 本質を見抜いてあやまたない
 確かさ—

選択と贅沢にも
 一向関わり合いが
 ない風に見えていて
 鋭い芸術家的感覚で
 一体何がすばらしいもので
 ほんとうに大切なものが
 何処に在るかを
 しづかに知っている彼—

「寺本知さんの思い出」

【中川 幾郎（理事長）】

私と寺本さんが最初に出会った場所は、岡町の古書店「文苑堂」である。当時の寺本さんには、寡黙な中に凜然とした気迫と雰囲気があり、思春期の少年にはうかつに近寄りがたい存在感を感じさせる人だった。だから、最初は客と主人といっても、ほとんど会話はなかった。

当時の私は、豊中第三中学校の一年生で、同じクラスの加古隆という文学少年と親しくなり、彼の影響もあってドイツやフランスの翻訳小説を読むようになっていた。だが、中学一年生の小遣い銭では、新品の書籍を買うのにはためらいがあり、古書店でそれらの小説を探すようになった。岡町の文苑堂は、私や、加古隆君がしょっちゅう出入りしていた古書店だったのである。

その加古隆が夢中になった小説が、ロマン・ロランの「ジャン・クリストフ」であった。私も同じように魅せられ、ついにはロマン・ロランをもっと読みたくなり、文苑堂で探すようになっていた。そんなある日、奥に陣取った主人が、「ロマン・ロランも面白いけれど、ヘルマン・ヘッセも読んでみたら」と私に声をかけてきた。なんと、ほとんど口をきいたこともない主人が、私の読書傾向をキチンと把握していたのである。

それをきっかけとして、今はこんな本を読んでいるけれど、次はどんな本がおすすめでしょうか、などと次第に会話を重ね



るようになってきた。いわば、古書店の主人に読書指導をしてもらうようなものである。寺本さんは、加古隆や私のような少年相手の会話を楽しんでいたのかもしれない。

思えば、その頃からすでに半世紀余りが経過していることになる。加古隆は、いまや日本を代表する作曲家兼ピアニストとして余りにも有名である。NHK番組では、実に多く彼の曲が使われている。また、映画音楽でも「博士の愛した数式」他、沢山の仕事をしている。だが、彼の仕事の根本にはやはり文学があることを感じる。私も、今は社会学者のはしくれではあるが、文学によって鍛錬された世界観を武器としていることに気づく。五

十数年前の少年たちに、人間を鍛錬する芸術への入り口を導いてくれたのは、他でもない文苑堂主人の寺本知さんであったと言ってもよい。

市役所勤めとなって、私が人権文化部文化課に配属となったとき、大阪人権歴史資料館へ同道させていただく機会があった。二人の間で、芸術や文化と人権はどのように関わるか、という話題になり、寺本さんはご自分の用件が済んだ後も、「もっとお話ししましょう」と言われて、大阪市内の喫茶店でずいぶん親しくお話しさせていただいた。

そのときに私が、中学校時代は文苑堂に入り浸っていたこと、ご主人であった寺本さんに、読書のアドバイスをもらっていたこととお話しさせていただいたところ、「えっあのときの中学生が貴方ですか」と、実に驚かれた。とともに、「そのときの中学生」をしっかりと覚えておられた寺本さんの、生きる時間の緻密さ、丁寧さを深く印象づけられたのである。

• そのようにしておつきあいが再開し、市の文化振興ビジョンを策定するときにも、さまざまに温かいご助言を頂戴しただけではなく、シンポジウムにも喜んで出演していただいた。さあこれからも色々と教えていただこうと思ったときに亡くなられたことは、私にとっても大きな喪失であった。まだまだ拝聴したいことがあったのに、と後悔先に立たずの思いが未だに残っているのである。



写真：豊中市立第五中学校 53 期生の檄「野に咲きし花の如く 寺本知さんの生涯」(2004 年 11 月) の一場面

情報BOX とよなか

■人権文化のまちづくり講座■

水俣病訴訟 ～水俣病患者の人権回復をめざした闘い～

日時：9月19日（木）午後7時～9時

講師：大川一夫さん（弁護士）

会場：豊中人権まちづくりセンター2階

参加無料

評議員のページ

「八重の桜」と京都・黒谷金戒光明寺

【西田 益久（評議員）】

豊中市人権協で役員現地研修を担当させていただいている。自分なりに研修テーマを決めるが、何より自分自身の学習の場にさせていただいているからありがたい。

NHK大河ドラマはある意味でテーマを決めるきっかけにしている。昨年は「平清盛」ということで1180年（治承4年）に巖島へ航海する高倉上皇並びに清盛一行を乗せた船団が、海上の安全を祈願したと伝わるたつの市の「室津」で研修した。またこの地は朝鮮通信使の寄港地としても知られた所でもあり人権学習として見聞を広めることができたのではないだろうか。

さて今年のテーマではあるが、迷いなく「八重の桜」と決めた。3.11の被災地復興に向けて第一弾がこの大河ドラマだったのである。連続テレビ小説「あまちゃん」では岩手県久慈市が舞台となっている。早春には蝦夷と蔑まれ、大和朝廷と果敢に戦った「火怨・北の英雄アテルイ伝」が放映された。

さて京都における「八重の桜」を巡ってみたいと思う。幕末の動乱期、幕府より京都守護職に命じられた時から会津の悲劇がはじまる。家老職の西郷頼母や田中土佐らが「それは背中に薪を背負い火を

防ぐもの」と諫めたが、藩主松平容保（かたもり）は一度ならず固辞はするが、最後は頑なまでに家訓を遵守する。松平家の家訓は藩祖保科正之が残したもの「大君の儀、一心大切に忠勤に励み、他国の例をもって自ら処るべからず。若し二心を懐かば、すなわち、我が子孫にあらず、面々決して従うべからず」とあり、他藩が幕政に背くとも会津だけは最後まで忠誠を尽くす意であり、容保公は忠臣の諫言（かんげん）を退けたのである。

黒谷にある金戒光明寺は京都守護職に命じられた容保公の本陣跡である。冬の特別拝見を利用して本陣なる大方丈を見学させていただいた。面白いものでドラマのセットを注視するようになった。本陣の細部が忠実に再現されているかどうか、何だか重箱の隅をつつつくようで褒められたことではないが、ドラマへの期待と理解



してもらいたい。黒谷金戒光明寺を本陣と決めたのは、この寺が城構えとして城塞のような自然の立地に恵まれたことにあるらしい。確かに眺望はよく、あらゆる備えに適した地であったのだろう。

人権がテーマであるから塔頭に目を向けたい。金戒光明寺の東側には広大な墓地が広がる。文珠塔を目指してゆっくり階段を上がると「会津藩墓地」という案内に目が止まる。そちらへ踵を返すと塔頭紫雲石「西雲院」に突き当たる。ここの開基は宗厳（そうごん）和尚であり、彼は朝鮮人である。豊臣秀吉の文録・慶長の役（1592～1598）により日本に連行された一人である。

宗厳和尚は、福知山藩主であった小野木縫之助（ゆいのすけ）が平壤付近に出動した頃に捕縛されたと伝えられている。連行当時は少年であった。宗厳和尚は滝川下総守雄利（しもうさのかみかつとし）の息女に仕え、息女の死後に知恩院満誉上人について得度、千日念仏を修行しやがて西雲院の開基となった。

この文録・慶長の役は道理のない侵略戦争であった。「老少男女を論ずるなく、能く歩く者は連れ去る。歩くこと能（あた）わざる者は尽く殺す」としておびたしい朝鮮人の命が奪われ、多くの人がこの国に連行もされた。朝鮮国土の田畑は荒らされ、宮殿や寺院を破壊し、人家のことが焼き尽くされたのである。凄惨を極めた戦いではあるが、朝鮮人義兵の蜂起や李舜臣率いる水軍の活躍により秀吉軍

を圧倒するのである。

徳川時代に朝鮮通信使（回答兼刷還使）が来日することになるが、母国に帰国できた朝鮮人は7千5百人とされているから、異国の地で無念の死を遂げた朝鮮人は数万に及ぶとされている。東山の麓に「耳塚」がある。惨殺した朝鮮人の鼻や耳を削ぎ落とし塩樽に詰めて持ち帰らせたことでもその残忍さは知られている。

西雲院の境内に一際立派な墓所がある。棟門を潜ると左手に見える。駒形の案内に立ち止まると、会津小鉄の墓とあり、初代上坂仙吉「(こうさか・せんきち) 1833年(天保4)～1885年(明治18)の墓とある。

会津小鉄とは、侠客であり今もその名は世に知られている。なぜここに彼の墓所があるのか。案内はこうである。京都守護職会津藩は幕府軍とともにやがて朝敵とされ、薩長軍と鳥羽・伏見で戦争となる。世に戊辰戦争（1868年）である。この戦いにより会津の悲劇は加速される。鳥羽・伏見の戦いで戦死した115人の会津藩士は賊軍とされ、その遺体は放置さ



れるのが常套だったようである。骸（むくろ）は野の露にさらされたのである。

会津小鉄こと上坂仙吉は会津藩が上洛の折に会津藩中間（ちゅうげん）部屋頭として雇われた。中間とは会津藩士の下働きをする人夫のようなものである。上坂仙吉はこの115体の遺体を200人以上の手下を動員して収容し、近くの寺にて茶毘に付したのである。それこそ侠客の意地を見せたのであろう。また遺品を会津まで政府軍の目を盗んで遺族のもとに戻したというエピソードが残されている。こうした功績により西雲院の境内に墓所が置かれるようになったのである。宗厳の墓所は寺の外にあるから破格の扱いである。

西雲院は会津藩士の菩提寺でもある。寺に隣接して会津藩殉難者墓地が広がる。140年程前の墓石が整然と並ぶ。蛤御門の変、鳥羽・伏見の戦いなどで殉死した352人の会津藩士たちが静かに眠っている。また金戒光明寺には徳川秀忠正室崇源院や春日局の供養塔もある。少し足を延ばせば隣接の真如堂には春日局の父齊藤利三の墓所もあるから興味は尽きない。



さて文珠塔の裏側にさらに京都ゆかりの人物とする墓所がある。江戸初期の音楽家、近代箏曲の父とされた八橋検校（1614～1685）である。検校とは中世・近世の官位であり盲人の最高位とされている。

八橋検校の死後、彼を慕って多くの崇敬者が金戒光明寺の参道をうずめた。参拝者のための一服としてニッキの堅焼き煎餅が参道の茶店で有名になる。これが後の京都銘菓「八つ橋」である。今では検校自身のことよりお土産としての「八つ橋」のほうが知られているかも知れない。検校作曲の「六段の調べ」を聞きながら茶店で「八つ橋」を味わうのも一興かも知れない。ちなみに参道の茶店こそ元禄2年（1689年）創業になる聖護院八つ橋総本店である。

最後に八重にふれよう。山本八重は会津戦争後に夫・川崎庄之助と別れ、兄・山本覚馬を頼り、母や姪を伴って入洛する。八重に京都での仕事を紹介したのは、すでに京都府顧問となっていた兄・覚馬である。1872年（明治5年）創立の「女紅場」（にょこうば）である。女紅とは、裁縫や機織りのことを指し、女性が生活するうえに欠かすことのできない技能を授ける教育の場である。正式名は「新英学校及び女紅場」とされ、当初は華士の子女が通ったようである。八重の兄・覚馬は早くから女子教育の必要性を説き、八重は舎監兼教導試補として働くことになる。舎監として、また養蚕や機織りの技能を教えたとされる。



この女紅場は、やがて京都府の女子教育のモデル校となり、1923年（大正12年）、京都初の府立京都第一

高等女学校に引き継がれ、戦後は府立鴨沂高等学校に発展し、多くの有為な人材を世に送り出している。

八重は、京都府知事こと榎村正道の紹介で、アメリカ帰りの青年・新島襄と再び結婚することになる。新島は榎村正道知事に、「東を向けと言われれば3年でも向いている東洋風の女性のご免だ」と言い、それならと八重が紹介された。新島は、井戸に横木を渡し、その上で編み物するような、どこか野放図で自由闊達な八重に心惹かれたのかもしれない。

彼は知人に八重のことを、次のように紹介した。She is not handsome at all. But what I know of her is that she is a person who does handsome.（訳：彼女は決して美人ではありません。しかし、私が彼女について知っているのは、美しい行いをする人だということです）。これが「ハンサ

ム・ウーマン」と称せられる所以である。果たして、八重はそれをどう思ったのか知らない。しかし、新島はその文末を It is enough for me.と結んだ。これは新島のアガペー（愛）である。

やがて、八重は新島を支え1875年（明治8年）、同志社英学校を創立させる。さらに彼女は女紅場の経験から、1876年（明治9年）、ドーン夫人と3人の生徒で私塾を創設する。それが女子塾となり、やがて同志社女紅場として認可を受けることになる。そして、1877年（明治10年）、同志社女学校開校を迎える。ここから八重に続く多くの自立した近代女性が生まれるのである。

●参照 京都人権歴史紀行 上田正昭
監修



評議員のページ

市井の文化人

「近場に住んでた音楽家」

【山口 博之（評議員）】

私が中学生の頃まで住んでいた家の向いに上野山さんの家があった。

幼稚園の頃まで上がり込んで遊んだりしていました。そのオバチャンが時々、「その部屋入ってはダメ」「今日はオジチャンが居るから来てはダメ」と言われ、私のイメージでは恐い、堅苦しいオジチャンのイメージが出来ていました。そのせいか、近所の道を歩いている時、大きな眼でギョロリと見られると、なんか恐ろしいものを感じていました。

ところが、テレビが来た頃、NHKのど自慢を見ていると、舞台の左端にアコーディオンを持った「向いのオジサン」が、ニコニコ顔でイスに座って居るのを見て、ビックリした事を今でも覚えています。このテレビで上野山正男と大阪アンサンブルフリージャのトップだった事を知ったのです。

フーン、そんなに偉い人やったんか、という思いと同じく、舞台では“よそいき”の顔しているんや……とっていました。

子ども心には、作詞・作曲・音楽集団をひきいる苦勞など、思い至る程の知識さえ私には無く、ただ、「やさしいオジチャンが恐いオジチャンか？」程にしか思っていないませんでした。

今思うと他人の苦勞も知らず、勝手に他人の家に入り込んでいった私が迷惑だったとは思いますが……すみません！

「祖母との会話から……」

祖母は「どんな有名人でも普通に町中に住んでいるのよ」「特に豊中近辺には……」と聞き、他にどんな有名人が居るのか聞いたところ、「池田の方にはまどみちおさん」と聞き、「そんなん知らん、何やってる人？」と聞くと、「ヤギさん郵便」「ぞうさん」など歌った事無いか？と問われ、「誰でも知ってるやん」と言うと、「その詩を書いた詩人がまどさん」と教えられました。「他にもっと近くでは？」と聞くと、「原田神社の方に寺本知さんと言う詩人が、同人誌や同じ文学をしている人の世話をやったりしている」と聞きました。

そういえば、講堂かなんかで校長先生の横におった人、あの人は詩人やったんかと、私の頭に入った寺本知像は「岡町の有名詩人」でした。当時の私は、寺本氏の解放運動活動など知らないままでしたが、市井に暮らす人の中には「案外に偉い人が普通に暮らしているのだな……」と思ったものでした。



寺本知生誕 100 年 豊中水平社創立 90 周年記念連続講座

2013 年は、寺本知生誕 100 年や豊中水平社創立 90 年など、豊中における部落解放・人権確立の歴史にとって、いろんな節目が重なる年にあたっています。そこで、部落問題および部落差別、部落解放運動がどのような変遷をたどって今日に至ったのか、変えることができたのは何か、変わらないままのものは何かなどを明らかにし、「部落問題の現在（いま）～これからを考える」機会とするために、本講座を企画・実施しました。

以下に、その概要を報告させていただきますが、3 講ともたくさんの方にお越し頂きました。部落問題をメインに掲げたこうした講座が少なくなっているのが一因ではと思います。人権問題あまたあれど、部落問題はなかなかとりあげられないのが、昨今の状況です。しかし、人々はある意味で「飢え」を感じてもいるのだと思います。それらを踏まえて、新しい視点、斬新な角度から、どうアプローチするか、きちんとしたコンセプトを打ち出せば、響くのです。改めてそれを実感した次第です。

第 1 講 歴史編 6 月 11 日(火)

「水平社 90 年と部落問題の今～被差別部落へのまなざし(差別の徴)を問う～」

黒川みどりさん(静岡大学教授)

・黒川さんが部落問題に正面から向き合ったのは、大学の卒業論文「三重県における水平運動」について書かれたのが最初で、その後、日本近代史研究者として歩んで来られました。近代(明治維新)～現代における部落差別をめぐる諸相を、歴史的背景を織り交ぜながら、懇切丁寧な語りに 40 名余りの参加者が聴き入りました。

部落問題とは、封建的身分制度廃止後も、封建的な物が残滓として残ってきた物と、近代が作りだしてきた物がある。一つは、「解放令」が出たことによって、自分達よりも絶対的に下位にあった「エタ身分」

だった人たちが、部落外の人と同等に肩を並べる、あるいは超えていく可能性が出てきたわけで、このことに恐怖感を抱く部落外の人たちが、「旧身分」とい



うことを根拠に部落差別を温存させていこうとした。

二つは、1881年(明治14年)デフレ政策の元で、もともと基盤が弱い被差別部落は大いに打撃を受け、貧困が顕在化し、衛生状態が悪くなり、病気の温床となって「コレラ」や「トラホーマ」が流行する。被差別部落など「下層社会」の人々への眼差しは厳しくなり、被差別部落に関しては「人種が違う、異種である」というしるしが作られていった。

三つは、鳥居隆三は被差別部落の人の骨の計測をするが、その主観的意図は「同じ日本人だということを言いたかった」と言うが、新聞で報道したことが、「被差別部落の人たちは異種である、人種が違う」といった認識が広まることとなった。

1906年(明治39年)、島崎藤村は部落民の中でもハイクラスの人物でも差別されるんだという、部落差別の不当性を訴えようということで「破戒」を書いた。1918年(大正7年)の「米騒動」では、「この米騒動は、よからぬ被差別部落民がやっていること」と言われる。

第2講 運動編 6月25日(火)

「部落問題とわたし 体験的部落解放運動史～運動は、部落問題観・人間観をどう変えてきたか?～」

藤田敬一さん(元岐阜大学)

部落問題との出会いの一つは、小学生のころ、疎開先が被差別部落の家だっ

そして、1922年「全国水平社」が設立される。しかし、「不用意に差別的な言動をしただけなのに、部落民・水平社の人々は集団で押しかけてきて糾弾をするから怖い」という、「こわい」というしるしが、新しい差別のしるしとして作りあげられていった。



※期待通り、黒川さんの話は切れ味がよかった。気鋭の理論家による、理路整然たる話は参加者のハートに染み入ったはずだ。近代(明治維新)～現代における部落差別をめぐる諸相を、歴史的背景を織り交ぜながら、懇切丁寧な語りに40名余りの参加者が聴き入った。110分の集中講義、久しぶりに酔った。

たことで、近所の子どもたちが、地名を叫びながら、私たちに石を投げたこと。ま

た、防空壕に逃げる時、「あんたは〇〇の子やから入れてやらない」と言われたことがあった。

二つ目は、当時の農家のトイレは家の外にあって、そこには食器がなおされていた。それは、被差別部落の小作の人が小作料を納めに来た時に出す食事で、不浄な人間に出す食器は、不浄な場所に片付けると聞いた。

三つ目は、中三の時に読んだ、島崎藤村の「破戒」。主人公である瀬川丑松の父親は屠夫で、丑松に「エタであるということ隠せ」という戒めを与える。しかし、彼の周りで「あいつはどうも目つきがあやしい」などの噂や、下宿に住んでいた人が、エタであることを暴かれて「不浄だ不浄だ、塩をまけ」と下宿も追い出される。

こうした体験が、「部落解放同盟」という団体名の存在を知り、よみがえり、「部落」って何だろう？と思うようになっていった。

そして、大学生の時に部落問題研究所に行ったことがきっかけとなり、部落に関わっていった。そうした中で、運動や組織の課題にも目を向け、なんとか克服していきたいという思いから「同和はこわい考」という本を書いた。

大阪府の意識調査を行うと、いまだに「同和地区の人は怖い」と思っている人が5割を超え、聞いたことがある人は6割を超えます。本を出して26年、人々の意識

は大きくは変わっていない。これまでのやり方を検証して、どんな取り組みをしていけばいいのかを考えないといけない。

最後に、部落問題から人権問題を学んで、人間と差別の問題へとたどってきたが、一番大事なのは「二項対立的人間観からの脱却」ということ。二つに分けて、それを対立させるような発想からは脱却しないといけない。私たち自身の人間観、「人間をどう見るのか」「人とどう向き合うのか」「どう生きるのか」という3つの柱を、自分の言葉で作っていくしかない。

部落解放運動の中で「あかんことはあかん」「できないことはできない」と言える関係が作られて、はじめてフラットな平等な関係になる、そういう関係が必要だ。「一人では何も出来ぬ。しかし、まず一人が始めねばならぬ」劇作家の岸田国士の言葉だ。自分でできることは何か？自分の言葉で考えて、悩み、苦しみ、自分で輪を広げていく。そういうことを心からお願いしたい。





※2時間があったという間で、フジタ・ワールドに包まれた。結局のところ、運動は部

落と部落差別の様相を劇的に変え、部落民にとってはもちろん、部落外の人々の生きようをも変えてきたが、指摘されたように、二項対立的な思考と関係性からの脱却はなかったように思う。

異論や異見を封じ、切り捨て、純化してきたことのツケは返済不能にまでなっているのに、なおもその道を進んでいるわけだから、朽ちていくのは仕方がないという気もする。

第3講 人物編 7月9日(火)

「名もなく、貧しく、美しく生きた人たち～豊中の部落の歴史と解放運動に学ぶ～」

溝口正美さん(部落解放同盟豊中支部相談役)

豊中の部落の歴史、解放運動を担ってきた人たち、さらに寺本知さんのエピソードなどを中心に話していただいた。

一つは、「水あらそい」について。1877年(明治10年)、新免村と麻田村が水を巡って乱闘騒ぎになり、新免南之庄(豊中の被差別部落)の人たちは、本村である新免村から加勢にかり出される。その中で麻田村に犠牲者が出るが、警察は犯人探しのために南之庄に押しかける。結果、前科があった人が捉えられ、獄中で亡くなる。「水あらそい」には利害関係を持たない南之庄の人たちにとっては、忘れることのできない事件だ。

小学校を作るとき、いくつかの村で一つの学校を作ったが、南之庄だけは「6番



小学校」として、単独で信行寺にできた。

「カニの横ばい事件」は、天皇に背面や側面をみせては不敬にあたるとして、正面を向いたまま、カニのように横へ歩行する儀式が戦後も行われていたことに対して、松本治一郎は、「人間が人間に挨拶するのは当然であるが、このような民主

主義の世の中になって、なおかつ人間が人間を拜むようにせよといわれても、そんなバカなことはしない。」と言ったことで大きな問題になった。

そうしたこともあって、治一郎は「公職追放」になるが、部落解放全国委員会はこのことに反対をしてハンストをする。これを指揮したのは書記長を務めた山口賢次さんで、豊中の出身。彼は家や家族、生活もなげうって、運動に挺身したが、孤軍奮闘・孤立無援のなか、43歳で自死した。

寺本さんは、差別表現などでは糾弾することもありました。必ずその後のフォローをしっかりとる人だった。「鳩の目、鷹の目がある人」で優しいところと、厳しいところを両方持っていた人だった。でも、準備してきたことを急に「やめとこ」の一言で中止することもあった。よく言われていた言葉に、「北風と太陽の太陽になれ」

がある。相手が自分で服を脱ぐようにしろと、こんこんと言われた。



・ ※豊中の部落と運動、人物関わる話は、象徴的なことは別にして、これまで外向けにはあまりしてこなかったように思う。それだけに新鮮味もあった。豊中の部落に関わる貴重な資料、艱難辛苦の中で闘った人々、寺本知さんにまつわるエピソードなど、興味深い話が聞けた。「もっと！」という声もあり、今後の課題ができたようだ。

【文責（事務局）】

●講演録について

3講ともとても好評でした。テーマと講師、それに聞き手が見事にマッチしたと思います。「当日、参加できないが・・・」という声もあり、現在、講演録を作成中です。10月初旬には完成・発行したいと思っています。ご希望の方は、当協会までお申し込みください。 頒価：一部500円（送料込み）

新着図書



寄稿

「柔能く剛を制す」^よ

～寺本知さんから学んだこと～

【友永 健三（部落解放・人権研究所理事）】

今年は、寺本知さんの生誕 100 年に当たるとのことで、地元の豊中支部を中心に、様々な企画が行われている。

部落解放運動の担い手だけでなく、行政職員や学校の教員の中でも急速に世代交代が進行し、寺本さんを知らない人が増えている状況を考慮したとき、在りし日の寺本さんの活動の姿の一端を紹介し、今後の部落差別撤廃・人権確立に向けたとりくみに役立ててもらうことは大切なことだと思う。このため、筆者が寺本さんについて強く印象に残った事柄を、以下に述べておきたいと思う。

一つは、筆者が1967年に部落解放同盟大阪府連の教宣局の一員として働き始めて間もなくのことである。大阪府連を挙げて、当時の左藤義詮大阪府知事等との交渉が展開されていた。大阪府連側の最前列には、泉海節一、松田慶一、上田卓三（敬称略）といった錚々たるメンバーが次々と力強い口調で、大阪



府の行政責任を追及していた。多くの人々が一致して認めることだと思うが、上記

の3人がそろっていればいかなる交渉相手であろうとも要求をのますことができたといってもよい交渉上手な幹部による追及であった。

交渉も山場になり、さすがの左藤知事も大阪府連側の要求に応じざるを得なくなってきたと思われたときに、200名ほどいた交渉参加者の後方から手を挙げて発言した人がいた。それが寺本さんであった。寺本さんは、前列に居並ぶ幹部とは全く違って、地元の豊中の部落の生活実態を^{とつとつ} 訥々とした口調で語り、大阪府の行政責任を追及されたのである。この時、初めて寺本さんを知ったのであるが、今から考えてみると、左藤知事をはじめ大阪府の関係者に、大阪府連側の要求の正当性を説得するための発言であったと思う。

寺本さんについて、もう一つ忘れられないことは、水平社の戦争責任について、部落解放・人権研究所で研究会を開催したときのことである。当時、松本治一郎委員長を含め水平社の戦争責任を厳しく問う論調が強まっていた時期である。この場に参加しておられた寺本さんが「今の若手の研究者は、当時の日本の雰囲気を知らずに、書かれた資料だけを取り上げて結論を導き出していると思う。私は、当時の日本社会の雰囲気を体験しているが、あの

頃は、ある程度戦争に協力する姿勢を示さないと部落大衆の生活や権利を守ること、部落解放運動を継続することは難しかったことをみななければならないと思う。」といった趣旨の発言をされたことを今でもハッキリと覚えているが、もっと詳しく当時の状況下での運動の姿を聞き取っておきたかったと思う。

寺本さんの活動スタイルについて、もう一つ印象に残っていることがある。それは、諸々の集会での「あいさつ」についてである。筆者は、常日頃から集会での「あいさつ」は極めて重要な意義があると思っているので、できる限り、集会の意義・目的を考え、参加された方の心に残ることを願って自分で「あいさつ文」を準備し、可能なならば印刷して配布してもらうようにしている。このように思うようになった一因として、寺本さんの「あいさつ」から学んだことが挙げられる。さまざまな組織の代表をされていたこともあって、寺本さんはいろいろな集会であいさつをされた。その際、必ずといってもよいと思うが、服のポケットからその日の挨拶の骨子を書いたメモ（黒と赤のサインペンで書かれてい

た）を取り出し、時折それに目をやりながら挨拶をしておられた。それ故に、寺本さんの挨拶は、他の代表の挨拶と一味違っていて、参加者の印象に残ったものが多かったと思う。

以上の述べたことが、運動家としての寺本さんについての思い出として強く記憶に残っていることであるが、日常生活上でも気配りをしておられたことについても、この機会に触れておきたい。それは、毎年クリスマスの時期が来ると寺本さんのご家族がやっておられる喫茶店（ドラ）からクリスマスケーキを芦原橋にあった大阪人権センターに持ってこられ「家に持って帰って子どもさんに食べてもらって」といって、くださったことだ。当時、筆者は毎日会議や交渉等に追われていて、家族と団欒の場を持つこともおろそかになりがちであった状況をご覧になっているの気配りであったと思う。部落解放運動の中にも、こうした気配りができる方もおられるのかと感謝の気持ちで一杯になったものである。

寺本さんが亡くなって早 17 年になるが、芦原橋にあった大阪人権センターも壊されて今はない。寺本さんが館長を務められ、リニューアルされたリバティおおさか（大阪人権博物館）も大阪府、大阪市の補助金がなくなって、厳しい状況に置かれている。このような時期であるからこそ、「柔能く剛を制す」ということを身をもって教えて頂いた、今は亡き寺本さんから学ぶことは少なくないと思うことしきりである。

2013年7月11日

お正月のテレビを見ましたら
村山福市首相のお話の中で
やさしい政治 創り出す政治と
いうコトバが出て……
現代はまさに混乱した時代で、私に国をまかせ
るべきも、人と自らにありましかつ、民意を
それとあきらむつた、(選挙の) 原理が……
しかし、この選挙を理も、(首相の) 責任を
は、強急ながら結果として、選挙して、少数の
弱者ばかり推し進め、(放逐) すること……
私は、(代) 首相で、やさしい政治、創り出す政治と
いうコトバを、(選挙) と、(選挙) の、(選挙) の、
(選挙) の、(選挙) の、(選挙) の、(選挙) の、
「選挙」の「選挙」の「選挙」の「選挙」の「選挙」

理事のページ

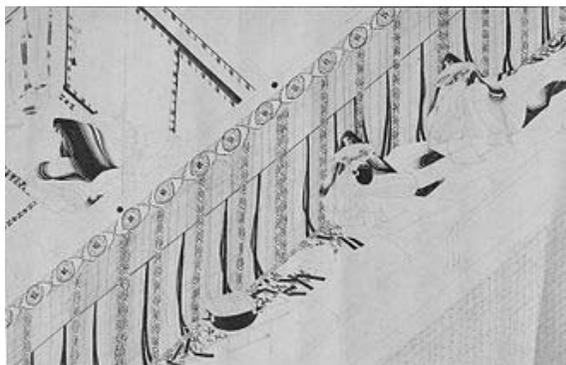
「蓑虫いとあはれなり」

【桑高 喜秋（理事）】

部落史を研究しておられる関西大学の上杉聡さんによれば、被差別部落の起源は鎌倉時代（13世紀）に遡るそうです。ただ、それは被差別部落が「士・農・工・商・穢多・非人」という社会的ヒエラルキーに組み込まれたことを意味するのであって、差別の歴史はもともとずっと古いといえます。（『これでわかった！部落の歴史』解放出版社）

鎌倉時代までは被差別部落は荘園の外に置かれていましたが、戦争に明け暮れる武士の世の中になって、皮革製品である武具や馬具を専門に作らせるために領主が自分の領内に被差別部落を囲い込んだのです。そして最下層の身分として位置づけることで皮革製品を安く、大量に手に入れたというわけです。

この身分制度がさしたる混乱もなくすんなりと定着したということは、その前（平安時代）から差別の実態が厳然としてあったということでしょう。上杉さんによれば、それまでは被差別者の集団は一般民衆の「下」の存在としてではなく、「外」の存在として、荘園の外に放り出されていたのだといえます。つまり、人間外の「異界」あるいは「魔界」の存在といえるでしょうか。



平安の貴族たちは、都大路で死んだ牛馬を都の中で処理することで自分たちの都を「汚す」のを許さず、「異界」に持ち去らせたのです。

この説はぼくにとってまさに「目からウロコ」でした。そこで思い出したのが高校生の時に読んだ清少納言の『枕草子』の一節です。

蓑虫いとあはれなり。鬼の生みたりければ、親に似てこれもおそろしき心あらむとて、親のあやしき衣引き着せて「いま秋風吹かむをりぞ来むとする。待てよ」と言っておきて往にけるも知らず。風の音を聞き知りて、八月ばかりになれば、「ちちよ、ちちよ」とはかなげに鳴く。いみじうあはれなり。（『枕草子』第41段）

これを読んで不快に思われる方もいらっ

しゃるかもしれませんが、よく知られた古典ですので、あえて現代文に訳します。

蓑虫はとても心を引く。鬼が生んだので、この子も父親に似ておそろしい気性があるだろうということで、親のみすぼらしい衣を引き着せて、「もうじき秋風が吹くころに来るつもりだ。それまで待てよ」と言い置いて立ち去ってしまった。その意味も知らず、残された子は風の音を聞いて8月頃になったのを知ると「父よ、父よ」とはかない声で鳴く。なんともいじらしいではないか。

蓑虫が鬼の子だという奇想天外な発想はぼくの記憶の中にずっと残っていたのですが、上杉さんの本を読んで、「これはひょっとしたら、清少納言は、見聞きした被差別部落のことを蓑虫に託して書いたのではないか」と考えるようになりました。

もちろん清少納言に他意はないかもしれませんが、しかし、なぜ蓑虫が鬼の子なのでしょう？秋田のナマハゲは蓑を着ていますが、平安時代には「蓑を着た者は異界からの使者＝鬼」とされたようです。だとすると、「蓑虫＝鬼の子」はそれほど奇想天外な発想ではなくて、ごく自然な連想だったのではないかと思うのです。

問題は「蓑を着た者＝異界からの使者」という考え方です。つまり、蓑または「あやしい衣」を着て人間界から排除された人々が平安時代からすでにいたと考えれば、上杉さんの説とぴったり符合してきます。



ところで、千年も前の人をつかまえて文句もないでしょうと言われそうですが、清少納言さんに一言文句を言いたい。それは「親に似てこれもおそろしき心あらんとて」という表現です。清少納言は、子を捨てようとする鬼がそう考えたと書いています。「それはないでしょ」とぼくは言いたい。「人に嫌われる鬼ならきつとそう考えたに違いなかろう」などという作者の勝手な想像が透けて見えます。そしてこの「勝手な想像」が現代に生きるぼくらの社会でも差別と密接に関わってくるのです。

ともあれ、ぼくはこの部分を書き換えて、この鬼は「自分のように人間社会に入れてもらえない境遇にわが子を置くくらいなら、いっそ・・・」と捨て子をしたのだと読むことにしています。

理事のページ

領家センセイ宅と幸^{こう}さんのこと

【八塚 勇一（理事）】

皆さんにご報告させていただきます。故領家穰先生のお宅にあった部落問題関係の書籍や資料は、5月中旬までにすべて片付けました。

4月7日に幸さん(先生の娘さん)からある依頼のメールをもらいました。そのメールで、豊中の家を5月末に地主さんに返すことを知りました。書籍はどうするのかを問い合わせたところ、京都の古書籍業T書店に任せるということでした。以前、T書店と話したときに、部落問題の書籍と資料は扱えないので全て処分すると言っていたので、部落問題関係は、私が関与することの了承を求めました。すぐに認められましたので、早速「部落解放・人権研究所資料室」の本多さんと「ひょうご部落解放・人権研究所」に連絡を取り、資料等の引き取りをお願いしました。現物を見るということで17日に待ち合わせをしました。

領家宅の郵便物などについて、連絡していた幸さんの友人のIさんから、領家宅の処分についての会議があるので出て下さいとの連絡がありました。会議では経過などが話されました。3月下旬に幸さんから先生の教え子で、公認会計士をされているOさんに豊中の自宅などの処分を依



頼られていました。Oさんは、幸さんの同級生で不動産屋をされているTさんを通じて、地主さんと交渉され、建物の地主さんへの売却と、5月末日の引き渡しで合意がされていきました。書籍等については、T書店と作業日程が決められていました。私から、部落問題関係の書籍、資料については、両研究所の協力に対処することを言いました。ただ、T書店の作業日程の中で作業をしなくてはならないので、3週間ぐらいで終わらせなければなりませんでした。

本多さんは、はじめ週2回来ると言われてましたが、実際は休みの日や仕事帰りにも寄られて、整理をしていただきました。領家宅は物があふれていました。2度増築され、10畳以上ある書庫と、グラン

ドピアノが置かれていた部屋が後から建てられたようです。書庫から本多さんが整理を始められたので、私は、その他の部屋にある本棚、段ボール箱や押し入れなどを、一度は目を通すことが出来るように取りかかりました。積み上げてある段ボール箱からは、学生たちの卒論やレポートが何箱も出てきました。全て、再生資源業者行きです。

様々なところにある箱の中から書類が出てくるので、大半の箱は中を確認しました。古い雑誌も出てきました。価値がわからないので、部落問題に関係するかどうかだけでふるい分けました。1951年に実施された大教組による五中の生徒へのアンケートも出てきました。とりあえず研究所が持って行ってくれました。領家先生の卒論や学生の時のレポートも出てきました。じっくり中身を読んで判断すれば、重要な物もあったかもしれませんが、手紙やハガキは、そのまま再生資源業者行きにしました。豊中文学の創刊号や寺本知さんの作品がペンネームの石塚嘉門で掲載されている文芸雑誌もありました。

紙類と衣服は、再生資源業者が持って行き、その他の家具や残った物全ては処理業者が片付けました。31日に領家宅に行ったところ、こんなに広い家だったんだなと思いました。

その頃、朝日新聞に知人の蔵書整理に関わって、その大変さがわかり、蔵書を全て、スキャナーで読み取り、処分した人のことが載っていました。身の整理をそ

ろそろしなくてはならない年齢になってきたから、こうしたことが話題になったりします。公認会計士のOさんによると、蔵書が多い場合は、京都、大阪、神戸の古書籍業者に複数来てもらって見積もりを取るそうです、紙類の処分費も含めて。これは、場所で売値が違うし、その業者の専門性でも違うそうです。学者でないのであまり関係がありませんが。

身辺整理の話が、ピースボートに乗っているときに話題になったことがあります。ある方は、乗船する前に銀行の口座や保険や知人などのリストを作り、子どもに渡してきたそうです。知人のリストは有効かもしれないと話になりました。親の交際範囲は子どもにはわかりません。主な連絡先を書いておくと、後はその人たちが連絡をしてくれるだろうからという話になりました。こんなことを書きながら私は何もしてません。

大学を卒業してから40年も経っている人々が、領家先生のために動いているということに感心しました。学生の時によほど強い結びつきがあり、それが続いている



る先生ってものすごい人だったんだなと改めて思いました。

領家幸さんのことですが、昨年6月にドイツで病気が発見され、ドイツで治療されていました。この5月25日にフライブルグ大学でドイツの親しい友人に見守られながらお亡くなりになりました。30日にドイツの友人たち50人以上が参列し、お葬式が行われました。幸さんが演奏したCDを流し、コンサートのビデオを見たり、思い出を語ったそうです。その後、火葬されました。ご本人の希望によりご両親と同じ寺に納骨することになっています。どのように遺骨を持って帰ってくるかはまだ決まっています。なお、死亡届は、7月2日に豊中市に提出しました。

もうひとつのピアノ Das andere Klavier
Ko RyokeのFreiburg(俳) Mitteilung aus Freiburg

2013年05月01日

■ 両親の遺骨は、5月21日にお寺に納めていただけることになりました。

両親の遺骨は、私がこんなことになって、宙ぶらりんになったままでした。

3月に、昔父のゼミに居られて、ご自身も得度も受けておられる先生に、どうぞ、納骨のをお願いします、と、大変にお手間なことをお願い申しました。

先生は、親切に引き受けてくださり、兵庫県の真ん中、市川にある、光明寺と言う素晴らしいお寺を探してくださいました。ご住職は、人権問題にも関心が深く、父のことをよく存じている、と、快く納骨を引き受けてくださいました。

そう言う有難いお寺に、今月21日に父と母は納めていただけることとなりました。

本当に、有難いことです。

納骨は午後2時からだそうです。

もしも、自分も出席をと思われる方は、大変に遠いのですが、一応どうやっていか書いておきます。

姫路から播但線で北上して、福崎(普通で2駅目)という駅から市川町西田中の光明寺に行かれるか、もしくは車で中国縦貫道を通って、福崎インターで南に5分ほど下りられるか、です。

私自身は、Freiburgから東のほうを拝みます。

●残されている幸さんのブログ
(下がその内容)

・@2013年05月01日

両親の遺骨は、5月21日にお寺に納めていただけることになりました。

両親の遺骨は、私がこんなことになって、宙ぶらりんになったままでした。

3月に、昔父のゼミに居られて、ご自身も得度も受けておられる先生に、どうぞ、納骨のをお願いします、と、大変にお手間なことをお願い申しました。

先生は、親切に引き受けてくださり、兵庫県の真ん中、市川にある、光明寺と言う素晴らしいお寺を探してくださいました。ご住職は、人権問題にも関心が深く、父のことをよく存じている、と、快く納骨を引き受けてくださいました。

そう言う有難いお寺に、今月21日に父と母は納めていただけることとなりました。

本当に、有難いことです。

納骨は午後2時からだそうです。

もしも、自分も出席をと思われる方は、大変に遠いのですが、一応どうやっていか書いておきます。

姫路から播但線で北上して、福崎(普通で2駅目)という駅から市川町西田中の光明寺に行かれるか、もしくは車で中国縦貫道を通って、福崎インターで南に5分ほど下りられるか、です。

私自身は、Freiburgから東のほうを拝みます。

楽遊ガイド

艱難辛苦の末、雪冤を果たし、故郷へ帰ったけれど、15日で出ました。おられんかったです。と、免田栄さん。取り消されていない「死刑」判決は重い十字架。

【石原 敏（評議員）】

心が塞がりますけど、ぜひ読んでほしいです。また、マイナー？な雑誌の話です。

狭山事件50年。免田事件65年。石川一雄さんと免田栄さんには共通点があります。

字を書けなかったこと。同房者や看守に励まされ、無実宣言をし、再審請求をし、手紙をいっぱい書き、訴えたこと。

第三次再審請求での開始決定(後に取り消し)で、死刑執行の恐怖から解放された時、看守が「免田、お前が上申書を書いて、手紙を毎月出したので、その熱意が実っただけだから」と。仮出後、看守の娘さんの結婚式にでた石川さん、現在第三次再審請求中。10月に15回目の三者協議予定。

二人とも支援者の女性と結婚しています。記事がふれている免田さん夫妻の葛藤に、冤罪被害者の心の闇を見、冤罪という不条理に立ちすくみ、石川夫妻に想いをはせます。

年金問題もです。復帰後の生活の糧の問題があります。社会保険庁は「保険料を納付せず、免除手続きもしていなかった。だから老齢年金を受け取ることはできない」と。国会での議論もありますが、これが政府の姿勢です。獄中に強いられて

いて、支払いができるのか。獄中者に周知徹底しているのか。ここでも不条理が罷り通ります。

ともかくにも、冤罪File（エンザイファイル）NO.19・2013年7月号を手にとって、68ページをあけてください。慄然としてまいります。

さて寺本知生誕100年です。とりとめもない雑感ですが…。

詩人、寺本知は、いつまでわしをつかう気や、と苦笑いしてはると思います。焦心疾走、詩集にんげん、寺本知のとわずかたり・にんげんはすばらしい、しのぶ草・寺本知は生きている、で十分や。花とに囲まれて静かに詩作しとるんやから…。

運動家、政治家としては、溝口君がおったからできたんや。彼には苦勞かけてきた。シンドイところは彼がやってきたんや。



鳩がコーヒーをのんでいる。親友の詩人、谷まさしさん作のキャッチコピー、言いて妙と感心しました。これで、やさしく微笑んでいる寺本知が刷り込まれてしまいました。

気は短かったです。ムラの人をまえにしているときは、気を許していたんでしょうか。怒りっぽかったです。対市交渉の時も、演技もあったんでしょうが、市幹部には優しく、支部員には厳しかったですもん。狭山同盟休校の時も会話が成立しませんでした。豊中高校差別事件糾弾闘争の時は空気はいつてましたねえ。

いしはらくん、いつ試験とおってくれるんや、たのむで…。何回受けたんやろ。1970年11月？採用です。

会館でイベントやっても人がこんやろ。それが（差別）問題なんやけどな。

（旧）市民病院で。どうしたんや。わしは検査や。おふくろ入院しとるんですわ。そうか…悪いんか…はあ…

家での葬儀に顔を出してくれた寺本さん、こんなぎょうさんの人がきてくれとんのか。安心したわ、友達おって…だつて。変わった、ちょっと面白いヤツと映っていたようですが…。

詩集 にんげん の扉に、可憐なタンポポを取りもどそう、のことばとサインをしたためてくれはりました。

寺本さんに教えてもらった日本画家、斎藤真一が好きになりました。

原田神社の緑に癒される、古いドランの二階は、ある意味青春でした。喧々譁々

の議論、語り合い、みつめあい…。ときには、コーヒーをのんでいる、鳩に出会ったりして…。

艱難辛苦 困難に出合って、つらく苦しい思いをすること。

雪冤 無実の罪をすすぎ潔白であることを明らかにすること。

免田事件 1948年12月29日事件発生（熊本県）。1949年1月13日別件逮捕。1950年3月23日死刑判決。控訴棄却。上告棄却。1956年8月10日再審開始（3次）。1959年4月15日開始取り消し。1979年9月27日開始決定（6次）。1983年7月15日無罪

狭山事件 1963年5月1日事件発生（埼玉県）、5月23日別件逮捕。1964年3月11日死刑判決。9月10日控訴審冒頭、無実宣言。1974年10月31日無期懲役。上告棄却。1次、2次再審棄却。2006年5月23日3次再審請求。2009年6月25日三者協議開始決定。12月16日証拠開示勧告。

焦心疾走 1981年6月28日発行

詩集にんげん 1986年11月29日発行

寺本知のとわずかたり にんげんはすばらしい 1994年1月17日発行

しのぶ草 寺本知は生きている 1997年1月発行

斎藤真一（1922－1994年）ごぜの絵で有名な日本画家、作家。

蛍池地域から

0歳から15歳までの育ちを見据えた地域連携を

2年前から、蛍池地域では、0歳から15歳までの子どもの育ちを保障していくために、蛍池地域の子どもの関わる公的機関(保育所・小学校・中学校・センター)と一緒に子どもを見て行こうと、夏休みの期間を半日だけ使って「校区合同研修」の取り組みを進めています。

どの年齢の子どもであっても、尊重される一人の人間として、向き合い関わるためには、関わる側が、自分を振り返り、子どもとどう向き合っていくのかを考える場が必要になります。そういう意味で、2年前は、センターの児童グループからと、第十八中学校の先生とで、異動で蛍池に来るときに、事前にマイナスイメージを持たされて来る先生方多いことから、自分の経験から話をしてもらい、その後グループに分かれて、それぞれの体験等の交流を行いました。

昨年は、いじめの問題から、小学校・中学校より発信があって、「望ましい子ども



も像」をグループで出し合い、そこに近付けるためには何が必要なのかを意見交流しました。今年度は、保育所での取り組みを発信してもらい、子どもたちの育ちをサポートしていくうえで、必要な支援をお互いに共有しながら、改めて地域連携の必要性について、グループ討議することができました。

毎回60名ほどの先生方が参加され、蛍池地域での定着した取り組みとなってきました。

【福島 智子 (事務局)】

豊中地域から

人が出会い、つながる「夏まつり」

7月20日(土)、轟木公園グラウンドで第13回「ひと・まち・であい夏まつり」が開催されました。昨年は午前中の準備が終わり、

さあこれからと言う時に雷雨になり泣く泣く中止になりました。中止になった時のことなどがきっちり打ち合わせされておら



ず、急きよ準備した食材の販売などをし、てんやわんやでした。

今回は去年の事を踏まえ、雨天の時のプログラム、進行なども話し合い、準備万端で当日を迎えました。備えあれば憂いなし、当日は天候に恵まれ、第五中学校の吹奏楽部の演奏を皮切りに、児童館の子どもたちのキッズエアロ、岡町保育園の子どもたちのパーランク・ユイユイ、おひさま保育園の子どもたちのぐんぐんどこまでも、人権まちづくりセンター保育所の子どもたちのグッキーダン

ス、センター登録サークルのアロハフラ豊中の方々のフラダンス、付属池田高校ダンス同好会のダンスなどが披露されました。その後、盆踊りがおこなわれました。また、各団体による食べ物や飲み物のお店、遊びのコーナーなど、たくさんの模擬店が出されました。

先日、ケーブルテレビの「かたらいプラザ」で「夏まつり」の様子が放送されました。当日はなかなか参加している方の顔などをじっくり見る余裕もありませんが、テレビを通してみなさんの笑顔を見ることができて、とてもうれしく思いました。当日を迎えるまでの準備や当日の炎天下の作業、店の当番、後片付けまで、大勢の人が関わり、その力が一つになって出来ていることを実感します。「夏まつり」への思いや感じ方はいろいろあると思いますが、地域で築いてきた人とのつながりを、これからも大切にしていきたいと思えます。

【酒井 留美 (事務局)】

老人憩の家のお風呂の利用について

60才以上の方は、下記のとおりご利用できます。

◆利用日：月曜日・水曜日・金曜日・土曜日

(利用日が祝日や年末年始と重なれば休みです)

◆利用時間：午後2時～午後8時(最終受付は、午後7時30分)

◆お風呂の大きさ：男女とも一度に4人程度が入ることができます。

◆利用料：無料

◆利用方法：受付を済ませて、担当者の指示を受けてください。

◆問い合わせ：一般財団法人とよなか人権文化まちづくり協会

(電話 06-6841-5300)

2004年から2005年にかけて、800人を超える在日女性を対象にした実態調査が行われた。就労の実態や教育、家庭内の暴力など、調査項目は150。「女性差別」と「民族差別」のいわゆる複合差別の実態を知ることができる。著者の李栄汝さんは、このアプロ女性実態調査プロジェクトチームの代表をされていた。

2007年3月の人権文化まちづくり講座では同チームの李月順さん（関西大学非常勤講師）を招いて実態調査についてお話いただいた。栄汝さんも同年8月高野山研で報告されており、少ししか話を聞くことができなかったがとても魅力的な女性だった。涙ながらに話されていたのが印象に残った。

在日女性実態調査についての詳しい内容は「立ち上がりつながらるマイノリティ女性」（解放出版社）をご覧ください。

本書は106頁と小説にすれば短めの作品で読みやすいが、著者の想いが凝縮されている。物語には3世代の在日女性が登場する。激動の時代を生き抜いてきた100歳になる春実（チュンシル）、嫁の勤めとは子をなすこと。子とはもちろん男児だ。5人目でようやく男児を出産するも病に倒れてしまう和子（ファジャ）。初孫として溺愛されつつも「なんでチンチン忘れてきてん」と言われ続けてきた泉美（チョンミ）。それぞれの時代を懸命に生きている



女たちの思いが伝わってくる。

男の子を産むことを強要するチュンシルだけを責めることはできない。チュンシル自身もそう言われ、女は男より劣っていると思込まれながら育てられてきたのだ。ファジャも男の子を産むことが嫁としての役割であり、家族として認めてもらえる手形だと信じていた。そして一ヶ月にも及ぶチェサ（祭祀）の準備も然り。そんなハルモニ（祖母）と母を見て育った3世のチョンミの葛藤たるや容易ではないだろう。そして私自身の生き方と重ねて読んでしまう。

私のハルモニは18歳で結婚して30歳で父を産んだ。3人目の叔母を出産したのは42歳。そして50歳で脳梗塞で倒れて寝たきりになった。まだ小学校低学年だった叔母は母親の世話で学校にあまり行けず、

近所のN君が給食のパンを家まで持ってきてくれたと話していたことがあった。チュンシル同様、男の子の孫を待ち望んでいたハラボジ（祖父）は三女の私が生まれたとき、ハルモニを怒鳴りつけた。4人目に弟が生まれたときは喜び勇み、入院中の母に3万円を手渡した。母は4人の子どもを育てながら毎年お盆とお正月、祖父と祖母のチェサの準備に奔走した。時々、「顔も見たことない先祖のチェサなんか何しにせなあかんの」と文句を言いながらも準備に大忙しだった。

男の子を産むことやチェサをすることがいいとか悪いとかではなく、その時代を生

きる人たちにとってはそれが自分が生きている証で、使命感や義務感を通り越して、目にも見えない、言葉にもできない何かが遺伝子に組み込まれている気がしてならない。栄汝さんが自分自身をファジャに置き換えているのか、チョンミに置き換えているのかそれとも全てフィクションの物語なのかはわからないが、在日として女性として生きてきた栄汝さんの人生を垣間見ることができた気がした。55歳という若さでこの世を去ったことが本当に悔やまれる。ご冥福をお祈りします。

【森山 輝子（事務局）】

新聞切り抜き帳から

体罰による誤った指導に終止符を！ スポーツや部活動の指導に体罰は必要ない！

教育現場における体罰についてはこれまでも何度か問題視されてきたと思う。特に部活動に関しては昔に比べて少なくなってきたとはいえるようだが、それでも運動部を中心に“シゴキ”などとセットで「当たり前」といった具合にこれまで一部で黙認されてきた部分があり、「厳しく指導しないとチームが強くない」、「だから体罰が必要なときもある」といった意見もあつたりする。また、プロスポーツ選手が「学生時代の厳しい指導（体罰）のおかげで今の自分がある」などと発言するケース

なんかもあつたりする。

僕自身、学生時代の部活動で教師（指導者）から体罰を受けた経験はないが、「強くなるため＝厳しい指導＝体罰」といったような考え方にはこれまでずっと疑問を感じてきた。教育の現場では様々なことが起こるため、「いかなる理由があろうと教師が生徒に手を挙げてはいけない」とまでは言い切れない気持ちも正直あるが、しかし、スポーツの指導において、体罰が導入される余地は全くないと思う。

とき **10月6日(日)**

開場:9時30分 開会:10時

(終了予定12時30分)

ところ **豊中人権まちづくりセンター4階ホール**

阪急宝塚線岡町駅下車・西北へ10分

※駐車場がありませんので、お車はご遠慮ください。

参加費 **1000円**(資料代)

●主な内容

寺本さんの詩の朗読

DVD「人 とよなか 寺本知〜つよく やさしく あたたかく〜」上映

記念講演「寺本さんを語る」(向井正さん)

沖縄舞踊(仲田準一&蛍のみなさん)

ほか

●パネル展&資料展もあります。

少年時代に目の当たりにした水平社運動の息吹は、寺本少年の身体の芯に終生、消えることのない灯を点した。そして、先人たちの悪戦苦闘を肌身で感じてきた寺本青年は、自らその渦中に身を置くことを選び取る。しかし、深まる危機と貧窮のうちに名もなく、貧しく、美しく死んでいった同志たちがいた。かくして、寺本知その人の心には、人間への限りない信頼と尊敬、人間らしく生きることへの渴望が刻印された。

「芸術を生み出すのが人間の本命なんです。それが人間の生きる姿なんです。そこを60過ぎてからわかってきた訳です。人間というのは、芸術を創造し創作する動物なんです」と言う。

人間解放と文化活動を両輪にしたその生涯は、野に咲きし花の如く、つよく、やさしく、あたたかい。森羅万象すべてを教訓として生きた人間・寺本知の香りが今、立ちのぼる。



主催 **寺本知生誕100年・豊中水平社創立90周年
記念事業実行委員会**

事務局 一般財団法人とよなか人権文化まちづくり協会

豊中市岡町北3-13-7 豊中人権まちづくりセンター

TEL 06(6841)5300 FAX 06(6841)6655

メール jinken@tcct.zaq.ne.jp

後援 **豊中市・豊中市教育委員会**

寺本知生誕100年のつや

自主制作 DVD

「人 とよなか 寺本知〜つよく、やさしく、あたたかく〜」

これは、寺本知その人を知っていただくために制作しました。寺本さんの生涯を振り返り、継承すべきもの、糧とすべきものを探り当てる一助となれば幸いです。

1. 少年期：水平社運動の息吹にふれる

水平社運動に身を投じ、過酷な差別を跳ね返さんと、一身をなげうつ先輩たちの生きようは、寺本少年の身体の芯に終生、消えることのない灯を点します。

2. 青年期：戦争から文化の必要性を学ぶ

先輩たちの悪戦苦闘を肌身で感じてきた寺本青年は、自らその渦中に身を置くことを選び取ります。しかし、深まる危機と貧窮のうちに名もなく、貧しく、美しく死んでいった同志たちがいました。かくして、寺本さんの心には、人間への限りない信頼と尊敬、人間らしく生きることへの渴望が刻印されます。

3. 壮年期：地域での解放運動と文化活動

部落解放運動の活動家、古本屋や喫茶店の経営者、市議会議員として地元で活動すると共に、大阪府や全国レベルでの仕事をいくつもこなします。また、自らも詩や小説を書き、文化や芸術をこよなく愛し、寺本さんらしい「人間観」を育みます。

4. 晩年：芸術への思い

人間解放と文化活動を両輪にした活動は、さまざまな文化人・芸術家との共鳴・共感を呼びます。その生涯からは、野に咲きし花の如く、つよく、やさしく、あたたかい、森羅万象すべてを教訓として生きた人間・寺本知の香りが立ちのぼります。

制作・著作 寺本知生誕 100 年・豊中水平社創立 90 周年記念事業実行委員会

- 10月6日に開催する「寺本知生誕 100 年のつどい」にて上映します。
- 本作品は非売品です（ご入手ご希望の方は、10月7日以降に、事務局までご連絡ください）。

あ・と・が・き

◆今号も選り取り見取り、みなさんの琴線に触れた記事があれば嬉しいです。中川理事長に巻頭を飾っていただきました。あのピアニストの加古隆さんとクラスメートで、しかも「文苑堂」に出入りしていたとはびっくりです。とたんに加古さんを聴きたくなりました。まだまだ興味深い話がありそうです。ぜひ、ご披露願いたいと思います。◆「八重の桜」と京都をテーマにした西田さんの一文は、大河ドラマの進行ともマッチし、いやが上にも興味をそそられます。聞いたり、見たりした事はあるけれど、歴史的な意味は知る由もないことは多いです。知ればまた違った見方・聞き方もできます。格好のガイドです。◆「市井の文化人」は「市井」なればこそ、そこここにいますが、市井に埋もれて、なかなかそれとは気づきません。人々の紡ぎ出す暮らしと共にあって、その息遣いに触れ、そこから生まれる「文化」こそ本物かもしれません。寺本さんも愛される「オジチャン」の一人です。◆連続講座の報告は、不十分ですが、後日の「講演録」をお待ちください。それにしても予想外の盛況でした。次の企画を！と欲が出てきますが、さてどうなりますやら……。◆友永さんから寄稿していただきました。連続講座の第3講に来られ、そのときにも話されましたが、寺本さんにまつわる貴重なエピソードの一つです。こうした話は、あちこちにあるはずで、本来ならこの機会に集めるべきでしたが、力不足で叶いませんでした。友永さんにはこの場を借りて厚くお礼申し上げます。◆「枕草子」と「部落問題」がつながる？なんてすごい発想です。今年から理事にお願いした桑高さんの論考は、何だか説得力があって、フムフムとなってしまいます。部落差別の根はどこにあるのか、疑問の深まりとともに、好奇心と探求心が刺激されます。これ

からも新鮮な問題提起を期待します。◆気になっていた領家センセイ宅の整理ができたとの八塚さんの報告。関係者の尽力の賜です。深甚の謝意を表します。そして、あの幸さんが逝ってしまいました。昨年5月、領家センセイが亡くなって1年を機に持った会合でお会いした時は、お元気だったのですが、よもや……。ご冥福を祈ります。◆「死刑」から再審無罪にはなりましたが、判決は取り消されません。失ったものは余りにも大きすぎるし、なおも立ちはだかる壁もあります。冤罪のむごさ・不条理を思います（詳細は、石原さんおすすめの雑誌で）。寺本さんとのやりとりには、寺本さんのあたたかさやさしさがにじみ出ていて、懐かしい臭いが漂ってきます。◆それぞれの特性と個性を活かした両地域の取り組みは、「継続は力なり」を地でいくものです。飽くことなく、倦むことなく、気持ちを切ることなく……。それが事態をいい方向に変えることにつながるはずです。◆10月6日「寺本知生誕100年のつどい」の準備も大詰めです。私たちの力は限られています。大がかりなことはいない。身の丈に合ったものに。質素な中に詰め込まれた私たちの思いが伝わり、共振・共鳴・共感が起きれば幸いです。参加をお待ちします。◆「3.11」から2年半、被災地(者)はいまだ苦闘の中にありますが、「忘却」と「風化」が進んでいます。6月に1年半ぶりに石巻市を歩きました。風景は変わってはいましたが、傷跡はそこそこあり、人々のくらしの匂い、街の活気は失われたままでした。何ともやるせない気持ちになりました。◆本誌も40号を重ねました。2003年12月創刊ですから、次号(12月)が10周年です。ふさわしい企画を考えなければと思案しますが、一番いいのは、みなさん方からの寄稿ではないか……。と思います。よろしく願います。

(事務局長：佐佐木寛治)

一人で悩まないで...

人権相談をご利用ください
今年度から、日時・場所等を拡充しました。

1. 人権ケースワーク事業（豊中市からの受託事業）

●定例相談

と き：月曜・水曜・金曜日（9時～17時）

と ころ：蛍池事務所（蛍池人権まちづくりセンター内）

電 話：06-6841-2315

●出張相談

と き：毎月第2・第4木曜日（13時～15時）

と ころ：豊中市役所第2庁舎1階市民相談課

2. 人権相談（自主事業）

と き：月～土曜日、事務所開設時（9時～17時）に随時受付

と ころ：豊中事務所（豊中人権まちづくりセンター内）

電 話：06-6841-5300、メール：jinken@tcct.zaq.ne.jp

資料室をご利用ください！

豊中人権まちづくりセンター2階「資料室」では、部落問題をはじめとする様々な人権問題



に関する書籍・資料等を収集し、閲覧、貸出をおこなっています。学習、調査研究などに活用していただ

れば幸いです。貸出については全て無料ですので、ぜひ、お気軽にお立ち寄り下さい。なお、図書等につきましては貸出中の場合がありますが、あらかじめご了承ください。

●利用時間

・月曜日～土曜日

・8時45分～17時15分

・日曜・祝日・年末年始はお休みです。

●編集・発行

一般財団法人

とよなか人権文化まちづくり協会

豊中市岡町北3-13-7 豊中人権まちづくりセンター内

TEL 06(6841)5300 FAX 06(6841)6655

Eメール jinken@tcct.zaq.ne.jp

ホームページ <http://www.tcct.zaq.ne.jp/jinken/>

郵便振替 00960-8-153806